

新古今歌人による『白氏文集』受容

―『文集百首』から―

札幌大学文化学部助教授 田中幹子

本発表は、鎌倉初期の新古今歌人である慈円と定家によって詠まれた『文集百首』に見られる『白氏文集』の受容を考察したものである。

『文集百首』の『白氏文集』の受容の状況は、平安時代の受容とは大きく違う。それまでほとんど触れられることのなかった閑適詩・感傷詩から多くの題を選んでいる。

これは隠遁生活への強い憧れを持ちながらも、最後まで官僚として生きていった白居易の人生に慈円が親近感を持ったためである。それは、九条家の柱としての重責をつねに感じながら、遁世に憧れる彼の気持ちでもあった。しかも、それ以前の文学は『白氏文集』に学び、吸収するという姿勢であったのに対し、慈円のそれは漢詩に和するといふいわば互角の姿勢で臨んでいる。よって作られた和歌は、漢詩句題をどこまでも契機として、あくまでも自己の

感情の発露として詠まれている。

対し、専門歌人としての誇りを持つ定家は、漢詩句題を結題の手法で読み、己れの感情をださず、物語的色彩を込めた芸術作品として作り上げた。

Arthur Waley の白居易 「訳」について

札幌大学文化学部教授 張偉雄

アーサー・ウェイリー (Arthur David Waley) (1889年8月19日～1966年6月27日) は、イギリスの東洋学者である。1910年、ケンブリッジ大学を卒業し、その後の1913年より大英博物館に勤務する。当時、日本語の辞書を含む資料等が入手困難な時代に日本語と中国語を独学で習得し数々の翻訳を行なった。彼の翻訳は今でも英語圏で広く読まれており、日本語・古典および中国語古典研究の先駆者とされている。

ウェイリーの主な仕事は次のようなものである。1921年～1933年に6巻に分けて出版された代表的な翻訳として『The Tale of Genji』(源氏物語)以外にも、1919年に『Japanese Poetry, The Uta』(日本の詩歌)(二万葉集、古今和歌集)、『1921年に『The No Plays of Japan』(日本の能)、『1928年に『The Pillow Book of Sei Shonagon』(清少納言の枕草子)他多数。また、中国古典からは1934年『The Way and Its Power』(老子の道徳経)、『1937年に『The Book of Songs』(詩経)、『1938年に『The Analects of Confucius』(孔子の論語)、『1942年に『Monkey』(西遊記)、『1956年に『The Poetry and Career of Li Po』(李白)他多数を英訳した。

ウェイリーは1949年に『THE LIFE AND TIMES OF PO CHU-I』(白居易)を上梓した。この本はそれまでのウェイリー自身の白居易についての研究の集大成である。それまでにウェイリーは以下のように、居易の伝記執筆のために綿密な事前研究をしていた。

1 *Chinese Poems*. Lowe Bros. London, 1916. 白詩33首

2 *Thirty-eight poems by Po Chu-I*. BSOS, 1917.

- 3 *Poems of Po Chu-I*, Little Review, 1917, 83首
 - 4 *Poems by Po Chu-I*, New Statesman, 1917
 - 5 *Further poems by Po Chu-I*, and an extract from his prose works, together with two other Tang poems. BSOS 1918
 - 6 *Three Chinese Poems*. The Forum, June 1928.
 - 7 *A Hundred and seventy Chinese poems*. Constable and Company Ltd, London, 1918. この本のPart IIはPo Chu-I特集。白楽天にこの論説は7ページあり。56首白楽天の詩が訳されている。
 - 8 *More translations. From the Chinese*. 1919. 白居易略年譜あり。白楽天の詩 32首
- 中国文学史における詩の頂点は唐代にあり、その唐代の詩人のなかで白居易はひときわ光芒を放っていたものであり、その詩文は、海を渡って、平安朝の昔から日本人に最も愛好されてきた。『THE LIFE AND TIMES OF PO CHU-I』において、ウェイリーは白居易をその位置していた時代の社会的な背景と関連性を持たせ、詩人はいかなる人間であるか、いかなる知的生活を過ごしたのかを追求してきた。

本発表はウェイリーの白居易研究の軌跡を追った。